

第5回 なぜお参りするのだろうか？

1 本堂の荘厳は何をあらわしているの？

■ 阿弥陀仏の浄土



お寺の本堂の畳（外陣）に座り、あるいは家のお内仏（お仏壇）に向かって、手を合わせてお参りされたことがあると思います。その時、本堂の内陣（ご本尊が安置されている場所）やお内仏の姿や形にどのような印象を持たれたでしょうか？

柱や壁などに金箔が施されていてとてもきらびやかな空間、様々な彫り物や装飾のされた非日常の場所といった印象を持たれたこともあるかもしれません。

お寺の本堂や家のお内仏は、生活の中でお参りをする場として大切にされてきました。では、そこには何が表現されているのでしょうか。

浄土真宗の本堂・お内仏の荘厳（ご本尊を中心としたお飾り）は、本来、姿や形を超えた阿弥陀仏の浄土を私たちの目に見えるようにあらわされたものです。

「浄土三部経」のひとつである『仏説阿弥陀経』は、毎月のお月参りで読まれることもあり、『阿弥陀経』『小経』とも呼ばれ、真宗門徒にとってなじみ深いお経です。

『阿弥陀経』には、阿弥陀仏の極楽国土のうるわしい姿が説かれ、その国に往生するために阿弥陀仏の名号を心にとどめることが示されます。そして、六方（東西南北上下）の数限りない諸仏が勧め護ってくださることが説かれています。

2 『阿弥陀経』には何が説かれているの？

くどくしょうごん しょぶつごねん
功德莊嚴・諸仏護念

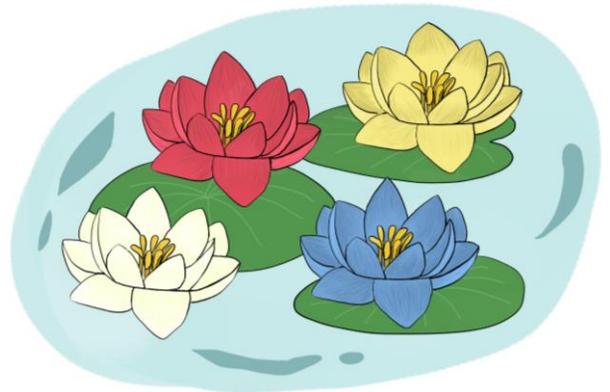
『阿弥陀経』には、阿弥陀仏の国土である浄土が「極楽」という言葉であらわされ、続いてその極楽国土のあり様がつぶさに説かれています。

これより西方に、^{さいほう} 十万億の^{じゅうまんおく} 仏土を過ぎて、^{ぶつど} 世界あり、名づけて極楽と曰う。その土に仏まします、阿弥陀と号す。いま現にましまして法を説きたまう。舍利弗、かの土を何のゆえぞ名づけて極楽とする。その国の衆生、^{しゅじょう} もろもろの苦あることなし、^{ただ} 但もろもろの楽を受く、かるがゆえに極楽と名づく。 『仏説阿弥陀経』

『阿弥陀経』にあらわされる極楽国土は、^{こん こん るり} きらびやかな種々の宝（金・銀・瑠璃・^{はり} 玻璃・^{しゃこ} 磔磔・^{しゃくしゆ} 赤珠・^{めのう} 瑪瑙）で飾られ、池には不可思議なはたらきを持った水が満ち満ち、底には金の砂が敷き詰められています。池の中の蓮の花は、青、黄、赤、白、それぞれの色で光り輝き、清らかに香っています。そして、天の音楽が奏でられ、大地は黄金ででき、天から昼夜六回にわたり華が降り注ぎます。

また様々な珍しい鳥たちが美しい声でさえずり、尊い教を説いています。

そよ風が宝の樹や宝を連ねた網を吹き動かし、何とも言えない美しい音を出しています。その声や音を聞いた人たちは自然に仏・法・僧に帰依する心をおこすのです。



そのような阿弥陀仏の国に生まれようと願うならば、阿弥陀仏の名号「南無阿弥陀仏」を心に保ち忘れないこと（執持）が教えられています。

^{ごうじゃじんじゆ} 恒沙塵数の如来は ^{まんぎょう} 万行の少善きらいつつ
^{みょうごう} 名号不思議の信心を ^{ひとしくひとえ} ひとしくひとえにすすめしむ 『浄土和讃』 弥陀経意

そして、東方・南方・西方・北方・下方・上方と、六方の世界に数えきれないほど多くの諸仏がおられ、それぞれの国で真実を説き、阿弥陀仏のはたらきをほめ讃え、その阿弥陀仏の国に生まれることを護り勧めてくださっていることが説かれています。

^{じっぽうごうじゃ} 十方恒沙の諸仏は ^{ごくなんしん} 極難信ののりをとき
^{ごじよくあくせ} 五濁悪世のためにとて ^{しゅうじょう} 証誠護念せしめたり 『浄土和讃』 弥陀経意

3 本堂ってどんな場所だろう？

念仏の道場

浄土真宗のお寺の本堂の様子を思い返してみると、どのような荘厳（お飾り）がされているでしょうか。

本堂の中央には阿弥陀仏（御本尊）が安置されています。浄土の世界を表現する本堂が、阿弥陀仏を中心として成り立っているということです。

御本尊の前に置かれた燭台（鶴亀）や花瓶などの仏具は金色に装飾され、本堂により違いはありますが、内陣の柱や壁なども金色に装飾されています。

お参りの際には灯明を灯し、花瓶に四季の花を立て、香炉に香をお供えします。



名古屋別院 中尊

本堂の荘厳（お飾り）を通して、阿弥陀仏の浄土が清浄にして歡喜にあふれ智慧に満ちた世界であることが、私たちに伝えられているのです。

また、阿弥陀仏を真ん中にして左右に様々な方の絵像などが掛けられています。真宗大谷派 名古屋別院の本堂には、向かって右側に、親鸞聖人・聖徳太子・七高僧、左側に、蓮如上人・歴代御門首のお軸が掛けられています。



名古屋別院 南余間（向かって左側）



名古屋別院 北余間（向かって右側）

そこには、お釈迦さまからインド・中国・日本という時代や社会を越えて、阿弥陀仏の本願を信じ、お念仏申してきた数限りない先人の歴史があらわされています。

本堂に参るなかで、本願念仏の教えを受け伝え、私たちにまでとどけてくださった方々の歩みをお敬いしてきたのです。

本堂やお内仏にお参りすることは、私に先立つ数限りない方々と出あい、常に仏の智慧に照らされている身とあきらかにされる、大切な時と場をいただくことではないでしょうか。

Q.本堂はどのような人たちが建てたのだろうか？

4 真宗門徒の生活って？

き え さんぼう

■ 帰依三宝

『阿弥陀経』には、浄土に住む人々は仏・法・僧に帰依する心をおこすことが説かれています。

お釈迦さま在世以来、仏・法・僧を三つの宝とし、その三宝に帰依することは、仏教徒の根本のよりどころであるとされてきました。

仏（ブツダ 仏陀）…お釈迦さま

法（ダルマ 達磨）…お釈迦さまの説かれた道理・教え

僧（サンガ 僧伽）…仏の教えをいただく人々の集まり

そして親鸞聖人は、お釈迦さまがよるべき法として教説された阿弥陀仏の本願を信じ、「南無阿弥陀仏」とただ念仏申す生活を、「御同朋・御同行」と敬われた人々とともに歩まれました。

そのお心を受け、真宗門徒は「南無阿弥陀仏」を中心とした本堂やお内仏の前で手を合わせ、ともにお念仏申す生活を伝えてきました。

私たちがお参りをする本堂やお内仏は浄土の相^{すがた}を形どったものです。浄土は私たちの思いや望みを叶えてくれるような世界ではありません。私たちの思いや望みを超えて、誰の上にも平等に成り立つ世界こそ浄土であり、そのような世界を願い続けてきたのが本願念仏の歴史です。

阿弥陀仏の本願を信じ、ただ念仏申せと教えられても、私たちは自らの思いを優先し、素直にその言葉を受けとめることはなかなかできません。それはとても困難なことであり、自分の思いを満たすために仏さまに手を合わせている、それが私たちの姿ではないでしょうか。しかし、私がお念仏申す背景には、自らに先立ってお念仏を申し、その歩みを通して教え勧めてくださっている方々があります。

親鸞聖人をはじめ、数限りない方々がそれぞれの現実のなかで阿弥陀仏の本願に出会い、ただ念仏申す生活を歩まれてきました。そこにはどのような願いがあったのか、これからもお参りをするなかでともに学び訪ねていきましょう。

先師の言葉

前に生まれん者は後を導き、後に生まれん者は前を訪え （道綽禅師）

拝むとは拝まれて居た事に気付^さき醒めること （高光大船）

お内仏(お仏壇)

一般に「お仏壇」と称されるものを、浄土真宗では「お内仏」と呼びならわしてきました。

「お仏壇」は、ご先祖を供養するための場所、家内安全を祈願する場所として受けとめられることもあります。が、「お内仏」といただくことは、阿弥陀仏を中心として、自らの日々の生活や人生におけるよりどころ(根本)を朝夕・時々には確かめ立ち返る場として大切にいただかれてきたのです。



① ほん ぞん 本尊
阿弥陀如来立像

② わき がけ 脇掛(右)
歸命盡十方無碍光如来(十字名号)
又は、親鸞聖人の御影

③ わき がけ 脇掛(左)
南無不可思議光如来(九字名号)
又は、蓮如上人の御影

④ しゅみだん 須弥壇
本尊を安置する壇。

⑤ くう だん 宮殿
須弥壇の上に本尊を安置する仏殿。

⑥ かしゃごうろ 火舎香炉
焼香をするもの。

⑦ け びょう 華瓶
水を備える器。密又は青葉をさす。

⑧ つる かめ しょくだい 鶴亀(燭台)
蠟燭を立てるもの。点さない時は朱の木蠟を立てておく。

⑨ か ひん 花瓶
生花を用い、四季折々の花をさす。

⑩ どごうろ 土香炉
毎日のお勤めの際に線香をたく。線香は立てず、折って横にしてたく。

